

繪本拾遺信長記

前篇

七

特別

13

2507

7



2507
23-7

繪本拾遺信長記初篇卷之七

目錄

柴田勝家上系之事

柴田勝家信長と凍玉川

宇佐山城合戦之事

同圖

小田信治と後討死

信長坂本出張之事

一揆多箕他親善寺と新堀川

秀吉計策一揆を破る
箕尾親善寺落城

諸國一向宗門後一揆蜂起之事

小田信興討死

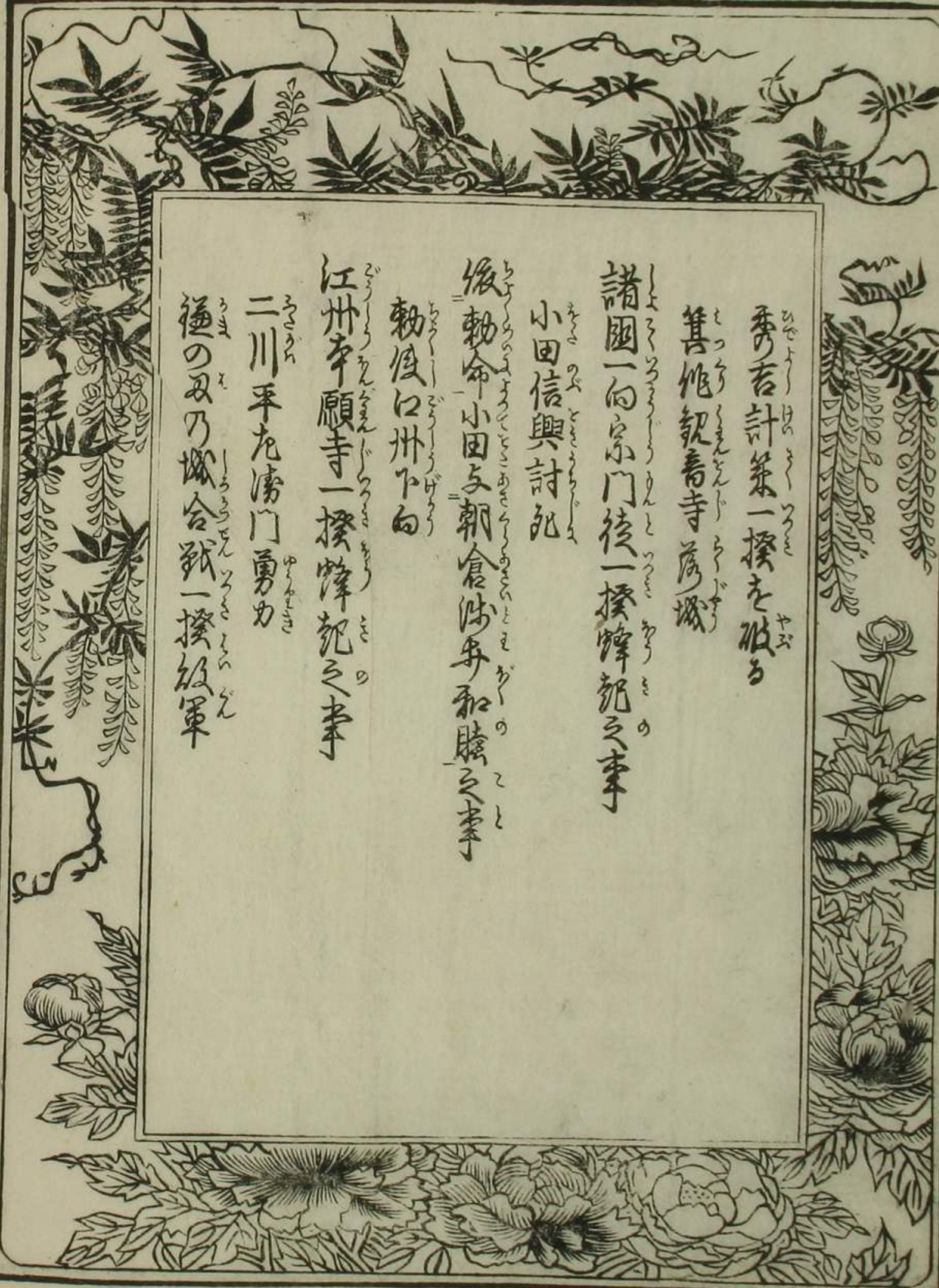
後勅命小田五郎倉田舟和勝之事

勅使江州下向

江州幸願寺一揆蜂起之事

二川平九郎門勇力

後之乃城合戦一揆放軍

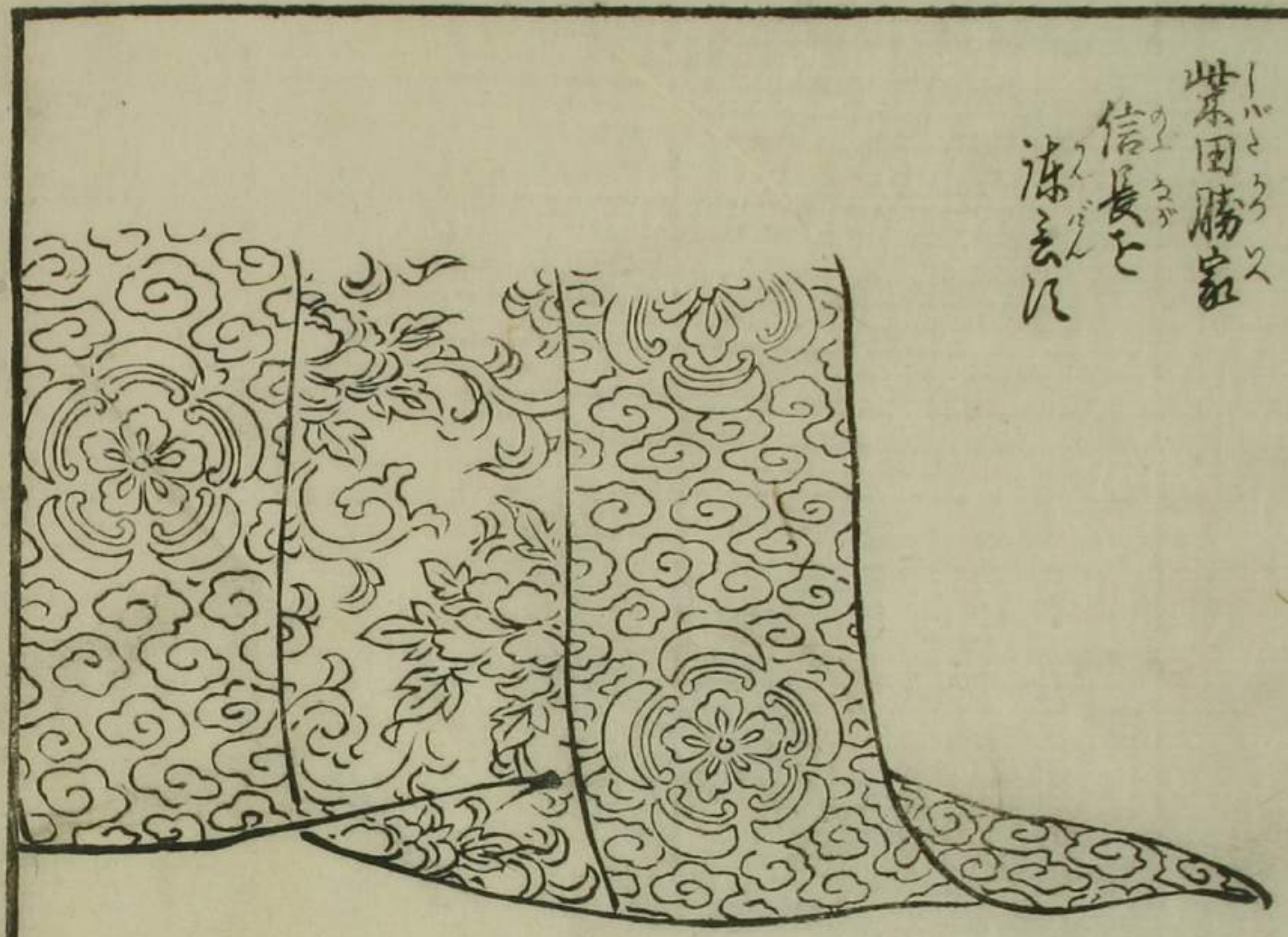


繪本拾遺信長記初篇卷之七

柴田勝家上系之事

小田弾正忠信長卿の本下辰吉郎秀吉が軍配より門々む門じき
退口を難く伏見と上着あり新將軍義昭の細河右馬殿辰吉
一人と御供をして中へ京都へ還御し信長の兵渡尾張の軍兵
と争ひ京都へ入りしに申す大津へ押寄り坂本へ向くとおまじき
柴田勝家徳めてやううけに徳中風の夕信長こそ攝州の合
戦討負討死のよしやうし上下強勅せる系承り及びては且又
將軍守護の武士もこれうき身以て憎く京都へ人数と入らん徳
中の人武を安堵せし其後坂本へ後向りとも速きゆいまこと
やうと信長守て不洞法やうや幸うる眼赤の歌とに





此田勝家
信長と
凍玄凡



るき洛中と鐘あり何のあはる日教を貰ふき汝いあくし老老毛
るれと云捨く弛弛終ふを柴田元来時呼の若くてもあはれを違
かけて信長御の馬の響をえく引止り其河又後後守様は仗一
糸せしより今日又あると教度の合戦終り押さるとえうるり
りく打物えつて老老毛うる不調法は仕り若きやに尋ねの教書屋
よへて茶をと給いんは不調法うるりもあづくんと云教あご
あふて引りしるる信長何の返言よし及び柴田と打捨たはの
方弛らさる柴田弛弛打りく年若き人の血氣よと命り終ふ
と伏し付て飛出りいませ燃の老毛方りん軍始末こそ肝要を
とくも勢二百余人引退し京都へ打入る軍の御容神と伺ひたり
叔系中と楊也りるる信長御こそ御機嫌よく摂州より凱陣あり

東は朝倉凌兵衛謀伐のあは州坂中へ我回しど皆く強勅をいりし
へと云らる程は京都の風説忽止ぬりて勝家と誠は州へ押
初程は朝倉凌兵衛陣不降山を山さとの標と通るふも恐るる
あてなく旗馬車と推ささせりは歌兵の討て出よし実崩し通
らんあつと独つつふ中と信長御の本陣へ是別しる実も勇武絶倫
の兵あると世の人奉て感どるる

宇佐山城合戦の事

是より九月廿日つりく城を勢は州宇佐の城と丸圍し合
戦は及びる出城は信長の弟小田九郎信治三ふ余騎をたて
籠り凌兵衛も押へるせしが秀吉も云とに依て森三九勝門射
可成素端しく信治も力を併せ城と固めて守りたりが九月廿日

last



日本書紀卷之四十四

宇佐山
合戦



日本書紀卷之四十四

四

曉天よりけり山と懸妻にほしとて城を勢川河野村より大軍
を以て押寄せ成井が勢ハ唐勝の漢より擁々一押止に森三九清門
是と刀をく一陣して敵の目と完させんと八百余騎を二より別け
て城外の町家に埋伏せしむと別て敵又向ふ城を勢の先陣朝
倉式部が系後三子余人鉄炮を打ち森勢又海り合ひとんぐ小
城ひろけけけけけ家の落し埋伏したる子の勢をひりしに別れ
城を勢の志中へ又六十挺の鉄炮とくくけて打ちひるむ石と撲
と入て突崩せし系後三子余人の軍兵大守討し右村九村及飯
小にけけけけ長政城を勢の先陣を崩すとて擁々より三子余
の還卒とまほし勝又系とる城兵の撲とまより面よりけけけ
穀粉微塵と森と森が軍兵射の勢又打陣と城中にして

引引を朝倉中務の勝長門守阿波賀三郎等多勢とそ喰と
くく勢をくく城を討る者殺を知りけ表む
森三九清門約毎に十八とて死軍の中又討死をばけけけ城中
又交々小田九郎信治血氣盛人の若ゆるん三九清門が討死を見
くと大又怒り又百余人の軍兵を引合し城戸を開いて勝をけけけ
考の中へ五三五三又切へ敵と討り後とて人とも目又余の勢
ての大軍切ととも案とも率ともせけ八方より引圍んと偏に
と城より信治と後又討死後兵を討り城の勢方へ大
級軍とゆり小なる朝倉儀舟の西勢へいともさびと中城へ
うけ二の丸と美浩とれと城中へは武後又即九清門肥田玄蕃日
助右衛門等命令と備まらぬしく防ぎ城ひたり九清門と



小田信治
を討つ
後討死

小田信治

と申すもろく城は向て押入殺をのこし居き日月廿一日は朝倉の西軍大はのかりより醍醐山科の傍を放火し近日都(美土)んと軍威を震ひていしりきり

信長坂本出張之事

去後又信長御尾瀬乃軍勢三万騎を引率し遠坂を越て日月廿二日下坂本陣と布つる軍威遠近よりひくは朝倉深井の西軍信長の多りた働きに恐怖しころろと西軍は叡山より登り峰ヶ峯(山)峰(山)又柵をより逆坂本と引つけよう討んと構へし信長は叡山乃林藤番を居發宛を村田中村唐崎西の藤原と小要宮の世を構へ大お瓜(新)軍勢と別ち志賀の城と信長の陣と定ちらるも漏れしと先陣と合戦を催しこれより朝倉深井

懐してやみだんをかく戦いをまじへばいづろは對陣教目及び信長余りの冷方なる小家屋多々岡右衛門尉頼家伊藤守を山門より利書を託せ朝倉一味の心と離しお軍家の味方と示すかとの地悲憤ありしと託せられしと衆徒等もて取引せたましく朝倉と毒を以て信長を討つとす大ま小怒り本願寺より山口と中郡で坊主系の新法をいしと懐くされはししく終は田中も滅却せしめ今の遠眼を報ひしと腹をうり強ふ愛はに十九院の照光坊より悪僧あり近在近郷の本願寺の門徒とらひ法款信長を討て京門惣昌と討んと觸る後又諸方の門徒殺しと弛集り其勢既又又々計及びひる照光坊とつろ一揆の大おとして河州親善守其他の要害と先鋒を顯る



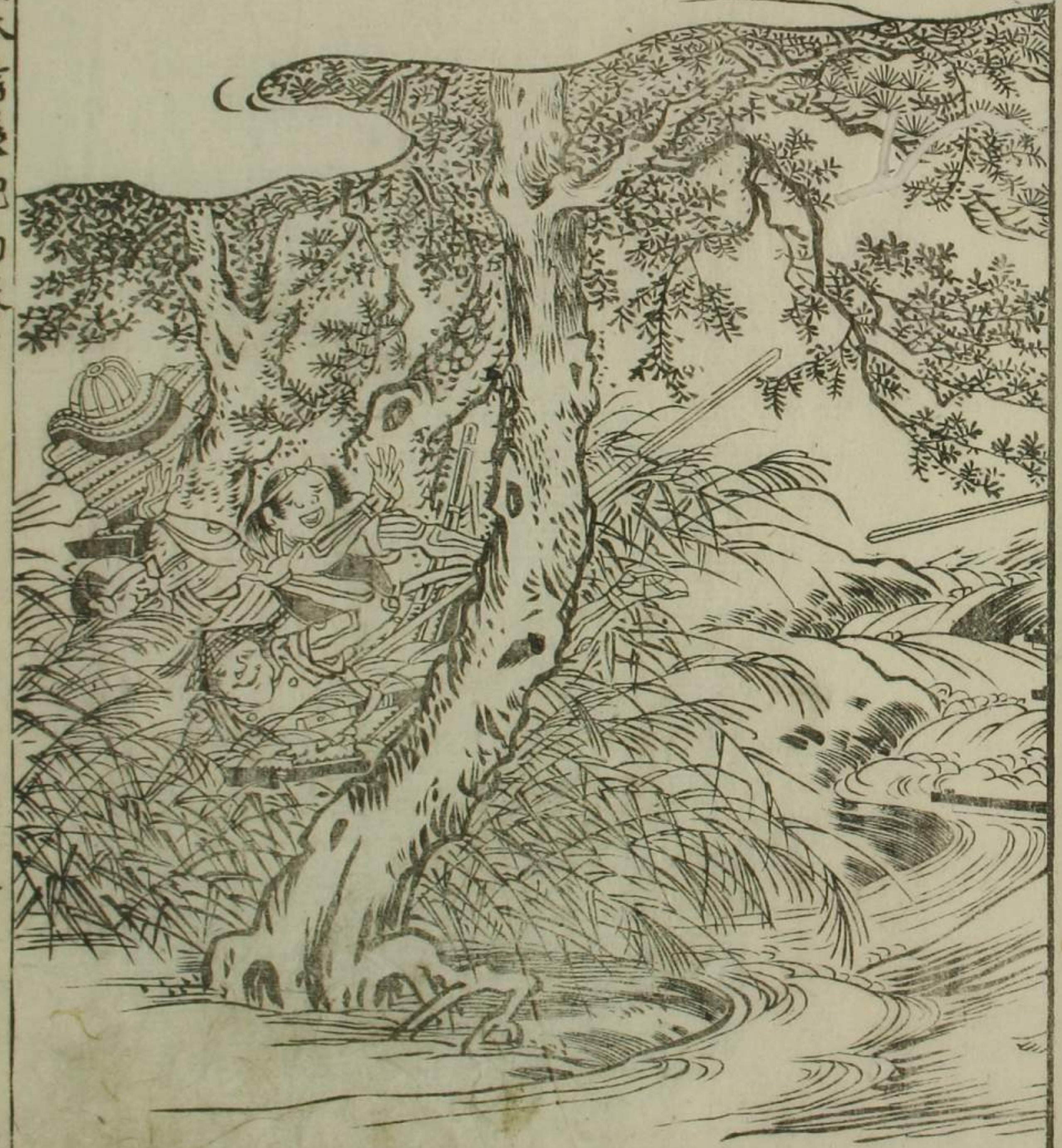
一様多
其性
親善
其
以

南本行掛言初卷七

勢いをもろいなる是より信長は州(着陣)の礪小谷の法舟久政
を押ししと本下辰吉郎と横山の礪又新らさせ佐和山の礪丹波
守が押入ふは屋又即ち備前守と百く屋敷の礪又止め屋れなる
が本下屋の両指一揆の勢い強大なるが次第に相済して中
信長御出陣諸方の働き又御子のふさぎなるが何れ一揆の
礪坊狼藉法よこしう捨置るは申しきなるる及ぶし押寄て退
散せんと両勢合して三又百人計略を定め親善寺箕他(押寄
ろろが舟の先物うれろろ士率三人を門後の百姓又出させ一揆の
勢より二つ両指(港)叔言せろろの横山の礪又本下辰吉郎百く
屋敷の守ぬを即ち備前守信長の礪いを助くろろ今日辰
吉(礪)に其(礪)辰吉、討く横山百く屋敷の両指を奮い勢

とに山(礪)震いひるしと告ぐれい大礪先坊大さよ礪の親善寺箕
他より二つまでの礪を出し一より山の礪の森の中又埋伏せし一
の勢い本下ろろあろろ本下屋又敵討せんと膽をくも打ちろりけ
討屋本下ろろ両勢とごと辰吉(向)入る気きして押寄ろろと礪先坊一
揆又中(礪)して礪炮少く打ちけさせ又捨置る入る実合ろりけ討寄る
屋が一より辰吉一揆に礪いせ自分勢と後又向け礪炮の者又百
余人又令して敵勢の埋伏しろろ森の中へ先と挿入し門と一
折入るれ一揆ろりて乃用え大よお遠し(礪)森の中よりさんぐ
ぬく進出ろろ本下ろりして押寄ろろ斬殺せは討ろろ若い麻を
私せろろと毛さんく礪先坊二軍大よ勢き味方の謀斗破
ろろぞ引よくと礪りろろ敵を打捨我れろろ箕他(礪)引よと

ひでし
秀吉
計策
一撥を
破る



日本信長言初巻七

十

為良即左衛門士年下加一人も余さば討たせと備へて
追討せよふけり討る一揆も余人粉のどくぬ城道く引に
が城門の上と瓢箪の馬印きりくと輝き本下が良等朝持孫平
堀尾辰次をさうお結さう一人も走るるるりんとあぐり
門を開きく一文字に斬ておれ一揆系肝と候し門の間は城
を歎みきりくとさうやこい叶いじと引久せば危が一軍をより実立
りも合せく羅立とい道出る者候又六十人大お照光坊と始
と二子計の一揆とくく殺るる根又森の中は埋伏し
軍勢も本下に斬きくは序て親善寺山へ逃移らんともふ
け城ももたや款勢入るる十文字の旗風よりひらせ危が良等妻
達影十即門を開い討くお本下と揆んで切まきとい言ふ

討る者一も余り人少慮りりくは落きて只一戦も平定されしを
周をあげ大おからの斬首三十八後者も持せ志賀の本陣もあ
あろくのはしととれい信長殊に感賞し移ひ具秀の志を
近く拓きく朝倉清兵衛山門等と休休とく謀と回移り秀
吉備でやたる其私と出討の形勢を考る小瓶元勢叡山の
臨瀬も固く引移り敢て合戦を好むる朝倉清兵衛の柔福の
又あつ流し計略あると見えは其の以朝倉義系山門の
擅那はして好し流し本親寺の内堀ありて其間又腰はし
陣と叡山の臨瀬も張り本親寺と通じて國々の門後一揆
を殺さば我君として進退なる軍士皆勞辱せん併と結
勝負を一挙も交せんとい討るの之津流り人國々の門後一揆



箕作
初代香寺
石塔

日本傳長言初卷十

降死くだりと云今勅孔の御みまありやべくは在る時より滅ほろぶ君乃
 御みまありけし時と云今其家出いる京都きょうと馳はりま禁廷きんてい奏そうすし御軍
 家の台たい徳とく又また隆たか勅命ちくめいを命めいを命めいて和贖わじやくの儀ぎと云徳とくびひ一度いちど朝倉
 を小國せうこく退たいす其間そのまは道國みちくにの二揆にげんを打平うちらげ不ふ去さに誠まことなるなりけ
 朝倉一家あさくらいっか滅めつと云今何なにの子細こまごまはまんと云云と國くにつて云云いは信長
 といけし時より三好さんこう本ほん教きょう寺じの一黨いっとうや合あせ京都きょうと坂さか本ほん
 一後いご法ほふせば申まをしまき大率たいそつとと難がたくくてみされらば其その中なか一
 を之これと歎なげひひ汝なんぢ一ひと魁けいもも子こ都みやこに登のぼりよりしく事ことと執と討とふふとと
 中なか後ごされらば其その中なか一ひと者もの者もの細こまごま飲いん堂どう後ごは後ご者もの三人さんにんと引ひ連れん其その後
 密ひそに京都きょうとにに馳はりまぬ
 諸國しよこく一ひと向むか家け門もん後ご一ひと揆げん體たい記き之の事こと

横州よこしゅう本ほん教きょう寺じは朝倉あさくら浪なみ舟ふねのの出い張はせしより信長のぶながの大軍たいぐん忽たち
 囲かこを解とき退たいきまるる上かみ人ひとをを上かみ下したのの人ひと皆みなく安堵あんた乃すなはちち
 御みまありけし時より三好さんこう本ほん教きょう寺じの一黨いっとうや合あせ京都きょうと坂さか本ほん
 一後いご法ほふせば申まをしまき大率たいそつとと難がたくくてみされらば其その中なか一
 を之これと歎なげひひ汝なんぢ一ひと魁けいもも子こ都みやこに登のぼりよりしく事ことと執と討とふふとと
 中なか後ごされらば其その中なか一ひと者もの者もの細こまごま飲いん堂どう後ごは後ご者もの三人さんにんと引ひ連れん其その後
 密ひそに京都きょうとにに馳はりまぬ
 諸國しよこく一ひと向むか家け門もん後ご一ひと揆げん體たい記き之の事こと

画本信長記秘卷七

十三

け時珍本を幸ひ先度の合戦味方の敗軍せしと恥て勢居して
後の座へし出さるる孤兒如上人自奉幸が許さるる軍師の
先日の敗軍を二日又引け引勢持とる来其謂る道は勝敵
を兵家の者もや受及り況や兵卒を軍師の令又遠ひ兵謀の軍
をぬり彼をえり幸は軍師其飛と美給いざりと候ふのさり
何ぞ自ら恥とるものぞと云ふと云く廣間又出給ひ板坂村
信長の軍兵を出給たりや否やと死給ふも幸幸云とに
信長を討たれた時節到來とは今日の日なりとい給ふと信長
兼てに國の三奴又い出ふより京都又美ふらんを恐る河内
の高屋又畠山治郎昭高と給ふらせそ外若いの城は三奴
ちま義次交持の城は安見丸道根州は修丹塩川藤本を楸

多の城は勇将を勢軍卒を守らせ容易付未ぬに是れ
上人より國の東守門後又西又と云ふ信長が後を信法歎退
治と云き信法をいれ少く諸方の門後一日は驛籠に
後信世を信長より斗う難談仕らんあり河内を
ヤケル上人を始て座の人をむりといは同し候ふが
國は獨ひたる是より門は修丹塩を外の國に教多の門
後一橋を企て同時又京坂中へ美と云ふといは
ん方こそさうりたり候ふ幸は先見明らうる
又勢州長治の長治守り大地と申檀城まはし
の六軍と集り長治小楠勢多たは修き老うる
人若し我ひと候んで一旦と引べうは女を
人若し我ひと候んで一旦と引べうは女を



小田原の城



小田原
信興討死

画不傳言補卷一

十五

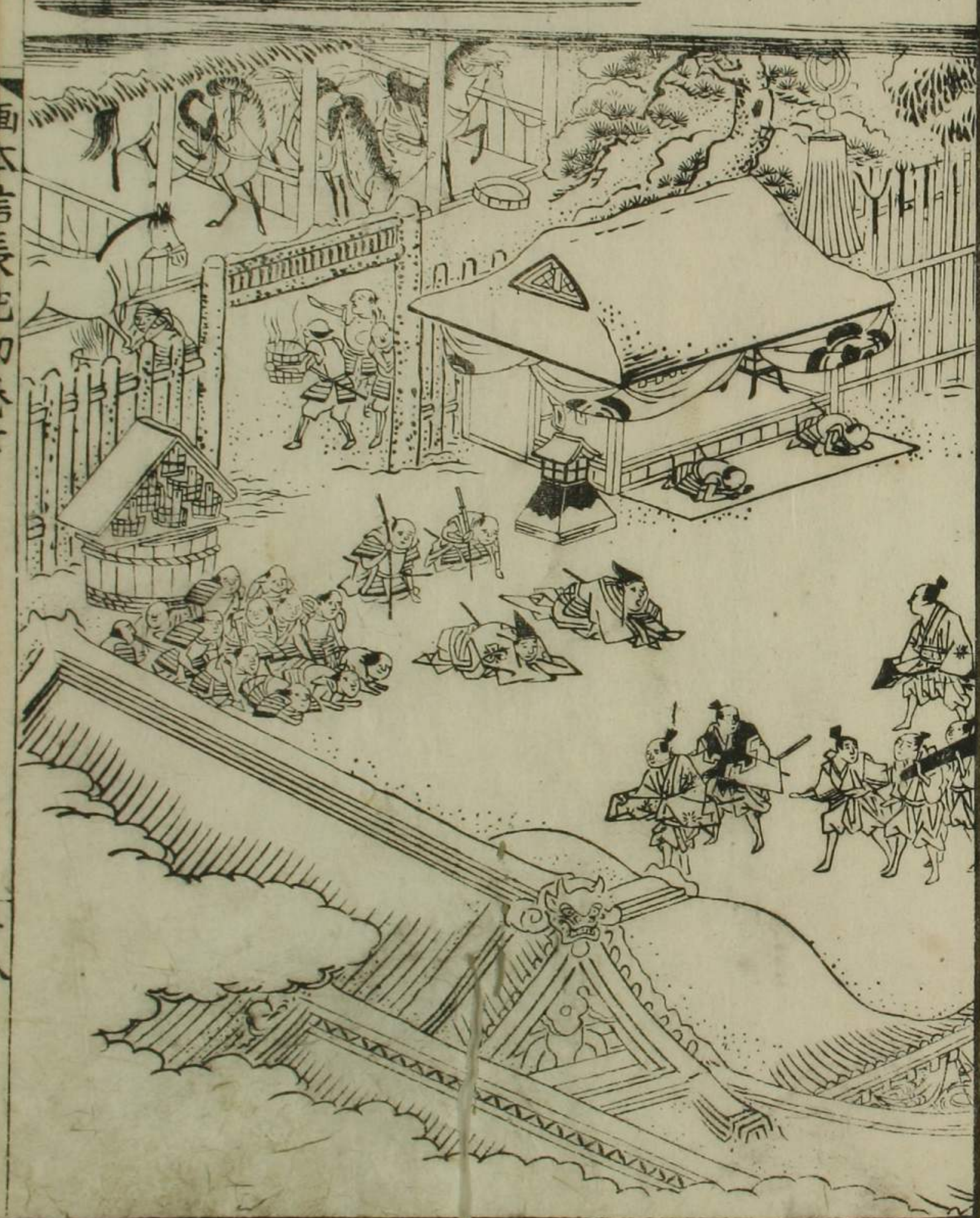
懸附得之と安定とと一向の誓詞とを相引付勢を放火し
 堀を焚き「村郷と押引其勢い愈て強大なり信長の家
 臣龍川左近將一益益て勢州勢園の爲としく衆名の旗を
 乃が軍勢を出合戦教度及びく門徒の一揆別して極
 勇の一益益軍せり度之割信長の令弁表七郎信興といふ
 河方尾張の地漕にりふふ足海の場と構（勢ら出）と被一揆
 多勢をぬて押下せ益益同く美討り小城中防戦兵ととい
 ても信長御の後治り来り以終に曲論を焚破られお丸もえ
 勢て防ぎ難し信興今りこよととられ多き百戦りのもの
 らいけ上の憂念ととく元龜元年十一月廿一日天守より後搦
 切て矢張り御内の侍お丸も火と放ち懸く討て出一人も討と

斬死をせりたり信長の御陣（後進とれ）信長涙と
 し眼も怒り且秀吉が明智を感せり都より嘸ひを
 密に相付居給ひたり

依勅命小田と朝倉凌兵衛和睦之事

其年とるる十二月より多し日く降積白雪の遠近の通
 洛を塞ぎ敵軍の肌膚を裂きぬ足龜て兵杖とせし中を
 のころに頼春乃運送自中より小田の軍兵日く以勞
 困くより一揆別せりし引ききり以若来とい今に只唐水と
 踏源測に錦心地しく勇瓦と云ふ出さり多し抑多小新軍
 義昭より奏伊を遂らと番り出今に正親町院の勅定にて信長
 と朝倉凌兵衛和睦の儀御咄りせられ勅使より渡御申納

勅使江戸州下向



言殿軍家の所候は二階寺後河守倫吉希に命殿をの
 御書と双方(下)賜り和睦仕るべきの條候後、
 物定の手紙を命の殿より誰か難儀やべしと長く兼依と
 白後互に跡急の條あづり候と信長義系記法文を
 三家万歳を唱へ和睦令くそのひ多し十二月十三日勅後
 志給ひおまじ十日信長志賀守佐山の陣を引くは湖
 本國(下)降らまじ朝倉義兵衛其望十五日降望山又ケ村を引く
 若く小谷の城へ降りたり候も摂州本郡寺へ引くは
 手書奉示を打て歎じて曰く嗚呼拙ひる朝倉義系
 淡舟長政叔山は誠厚して信長を喰ひ止りに國
 の一味に謀り合せ斯彼不より惣配して京都へ押
 入る候に

集る信長殿はた軍勢を以て小防ぎ我人も後軍せ
 ゐあづり候に計て討も乃り信長と討えも安
 き小寺のいさういさうと和睦したるは陣と
 其の抑りさよ見え信長が小西家とも減
 其悔も何の益も是れを掃く歎息
 後奉朝倉淡舟信長は妻己が
 たりと伊人毎小感

江州本郡寺一揆降死之事

望とい元龜二年江州佐和山の城を
 して城を用き日國を引退くは後丹波守
 押ひくるはびなき勇若く去奉
 姉川表小田勢合我の

時秋味方の目次登りし比類なき働させ功の者之れも浅井
がありとま朝倉がうろまひの心よ叶ひたると後小田の幕下り
属せり是と始にして大尾の城を中津越丸浦門朝妻乃城を新
庄駿河守と皆浅井と捨て信長又海取せり是よりして浅井
又子大よ怒り信長の表裡武士勅命よりして和賚潤ひ誓言
の要も乾きり小我幕下の勇士と欺き味方よりして武家の
陣と折きて妻素らん計略之押のま信長をひ知らせんとて幸親
寺末寺乃大坊を教多かたらひ門後の一揆と集めたる小僧足
よ應信長ととさんと馳集り大ねは箕浦の柳を教寺に又入
新庄の金光寺二子余人朽本の忠教寺又百人と坂の順慶寺
又百人中須本の徳教寺二子余人本町の信教坊又百余人益田

のま宗守三子余人唐川の智照寺八百余人長沢乃後回寺に
余人下坂の後照寺三子余人都合其勢二万余人浅井が味方又
係じたる長政又子大子小教び先小田方の構へ居る種子の城を
妻浦ひはじりのも名は使へんとく家長浅井七郎村兵庫
政中津日向守三人を身死して元龜二年八月六日種子の城へ
押寄せ民家を教次所を破り嘆き叫んで妻よりたるけ城と
守り大ねは田圃箕浦の怪人城次郎藤清といふ者へ元より
あひしうごらるるれが何の体人もあざれども家老樋口三郎玄清
多経尾右近等と力と併せ必死と覚悟防ぎ致し去程は横山
の城を本下坂を即棄るを以て味方の附城妻浦をさせて
去けしは後浩せんといふが折居人教もあらうけしは家被



二川
辛元備門
勇力

日本傳長言神卷七

石の百姓とめたらひ種を散紙籬をえおせ近辺のふくよとよし
 め旗を勤しし金鼓と鳴し「多勢の勢より死をよめては其
 めいひ勢又百余人例の飄草乃馬平先と押立自ら大音
 又石系よりい出附日本一の別の若本下及若即強押の後指と
 ところ一揆の奴系そこをいまた鳴りく一揆の後陣後田寺う
 勢の中へ面もろくは切てうりに方へむい 追ち せ次又揆
 し後照寺裏の道して逃ゆを秀吉下知しと逃る者と追ふ
 りゆと斬捨はして首と丸々と罵て志系寺が三万余人の心中
 へ五三五三又切入く右と左へ追崩其ありとまれ烈しきゆ極
 虎の解羊の中へ入く教く追より若のは「城中よりこれと
 かんく本下が後指よりぞ討てゆくか」と合せよと城の本入証

治郎権口多羅尾のちとも又時と喚ひく突立とい集り勢の
 一揆より法成も見たりて逃ゆと城兵秀の若が勢と一ひにあり
 追討は教例は一揆の大お帆寺新子の勢又百余人入替
 て戦へい金光寺法親寺後照寺等も敵軍とまらり又万余
 の勢とめて下長坂をえていし堀本下が修るり小勢と八方か
 名困と穴花とらりして戦ひたる處は堀の二ノ子丸浦門に
 いふ大力の男あり義系よりの戦ひはちかも刀も打ちあてきり
 追考者と左右のひれ引とらへ人磔と投くまは一揆の軍兵はる
 冷し乃勇力や人間業はよもあはしと是がふるよ用きりひ
 き又引くよかりなる名成と坂の帆寺大さふ怒りきりるき
 若ともが軍の仕中や款い天麻鬼神よもい命と捨て戦

孫の
乃
合戦
一揆軍



日本傳長言初卷上

又は何の恐ろしき事か我々續けし味方も二ツ玉也し鉄炮
 の福しみを定めてお敵つゝ二川の運命や憂うりし獨板を
 をおぬりし霧よりろく滑らせり多羅尾右近をさへ
 悪き坊主とて勅くるといふ事小太夫の槍とろりふ門と打
 ぐれ順美寺も突くれば順美寺もも強がはれく槍と打
 らぬ人ませしとせだ戦ひしが右近が武勇や勝りたるを順
 美寺と美道と突倒し首とえてはしとろり其外城方の勇士
 林甚之悪といふ者もけりて討死をれば一揆方の別若返回
 又右馬門加を助七とんと十余人戦死し引立てて見へるは香
 吉兼記おろり味方を拓きとい実崩とてき塩合るるを進め
 とり知れれば本下が勇長朝比奈平勝須賀小六福田大炊師尾

後々等切先とならんといふて斬立止ば一揆の熱戦終ひ
 叶り下板にしく引射を強えく浪辺の海へ押し流し湖中
 漂ふ大勢を退まじしとてえんぐと切殺しの原より海士の業
 の勝つふさま小畑よりろりきし討死を者九七百人堀本下
 勝岡を三度上げ銘く居城へ引えたる

繪本拾遺信長記初篇卷之七終

